



美那川雄一さん
高校教員（社会科）

アクティブラーニングの伝道師

生徒が主役の授業によって学びの質的転換を推進する

アクティブラーニング型授業を高校世界史に本格導入。意欲的な授業は学校全体の授業改革を牽引し、全国から注目されました。そして改革の真の目的は、健全な地球市民の育成と、世界平和への希求とにありました。

生徒同士で学びの質を高め合う アクティブラーニング

「ご自身の授業にアクティブラーニング（以下「AL」）を導入された経緯をお聞かせください。」

美那川 それまで私は多くの知識を教えるタイプの授業をしていましたが、指導主事の先生から、もつと生徒に考えさせてみてはどうかと助言をいただき、グループワークを基本とする論述指導を始めました。それが約10年前です。

——具体的な授業内容を教えてください。
美那川 前任の葦山高校で世界史Bを2年生から教えた時は、まず生徒に教科書の文章を抜き出させることから始めました。あるいは用語集に載っている説明を50字に要約させる。半年間はこうして高校世界史特有の文体や勉強法を徹底的に学んでもらい、その後グループワークに移行します。2年生では世界史が得意な子と苦手な子を同グループにして、苦手な子には得意な子の学習方法を観察してもらおう。教育学で「正統的周辺参加」と呼ぶ手法です。他人のする事を見て学ぶのは、私たちもよくしますね。3年生の夏

以降は学力レベルを揃えてグループを組み、学んできた事項をもとに自分で考え、論述してもらう。生徒は私が独自に作ったルーブリック、つまり評価基準を使って自分の学習ポイントを押さえながら、問題発見・解決力を育てていきます。つまりALは、課題への向き合い方や学びの質を高めることが目的なのです。

——AL型授業によって、生徒さんにはどのような変化がありましたか。

美那川 この授業を2年近く受けた3年生にアンケートを行ったところ、高い評価が返ってきました。書くことによって因果関係や時系列が整理でき、歴史的事象を理解しやすくなった、問題集を何度やっても理解できなかったのに、グループワークを1回しただけで内容が定着したなど、肯定的な声が多数ありました。「悩んだ分、後まで覚えている」というコメントもありました。

——知識は使ってこそ定着するということですね。

美那川 だからこそ生徒が知識を使う場面を増やしてあげたいのです。学校に来ているのだから、対話による学びを仲間と一緒にしてもらい、知識を使い、定着

させてもらいたい。そして知識が定着すれば大学受験にも生かせるわけです。

アクティブラーニングの普及に 内外で尽力する

——全国的に見て、高校におけるAL型授業の普及度はどの程度なのですか。

美那川 小中学校、大学では既に普及していますが、大学入試制度が変わらないのだから高校の授業は変えられないという考え方が、高校教育界ではまだ多数派です。しかし実際にAL型授業をしたところ、私たち教員が思っている以上に高校生の方がALを求めていた。世界史の構造的な学びも、ALだとみんなパズルを解くような感覚になるのでしよう。生徒にとってはALの方が既に普通という感覚なんですね。

——前任校の葦山高校での活動は、全国的に注目されたと同じでした。

美那川 隣接地区に進学実績の高い進学校があり、そちらを選ぶ生徒に対して葦山高校をさらに魅力的な学校として認識してもらうため、学校を挙げての授業改革に取り組みました。もちろん進学実績

は上げたいですが、補講や宿題を増やすのは真の授業改革とは言えません。生徒が大学に進み、さらに社会に出てから必要とされる力をつけてくれるようにと、教育のベクトルそのものを変えることになった。教師が一方的に話す授業ではなく、生徒の思考力や表現力を育てる方向へと舵を切ったわけです。その核となったのがAL型授業でした。私の任期最後の年には「学びの研究会・SAP (Share Advance Project)」が組織され、私が研修主任を務めました。先生方を少しずつ巻き込んでいき、ALの裾野を広げていく。実際にはかなりの割合で、各教科の授業も変わったと思います。

——生徒より、先生の意識改革が必要ということでしょうか。

美那川 高校教員というのは一人ひとりが、いわば職人さんですね。自分の授業について、他の教員と意見交換をするようなことは、あまりありません。しかし私たちは結局は人を育てているわけなので、最終的には学校全体で教育の方向性を決める必要、責任がある。そのため教員同士で話し合う雰囲気、教育学者のウェンガーが言うところの「実践コ

ミュニティ」を作りたかったのです。

——県の高等学校教育課程研究委員も務めておられますね。

美那川 文部科学省がALの目的としている「主体的・対話的で深い学び」を静岡県約100校に広めるにあたり、研究を続けています。現場での授業と並行してパイロット的授業を行い、情報の共有やAL型授業の普及に努めています。

アクティブラーニングで 養うべきは「本質を見る目」

——世界史を学ぶ大きな意義は何ですか。

美那川 世界史を教える最終的な目的は、広い視野で物事を考える力を養うことだと思います。歴史学の基本は「読む」と「書く」ことです。では何のために書くのか。一つは歴史を正しく知るため、もう一つは多角的に物事を考えるためです。例えば私の授業では「国家が衰退するとはどういうことか」「戦争はなぜ起こるのか」という問いを高校生に与えます。そこで培った本質を見る力や課題発見・解決力が、大学や社会で生かされる。そこに高校教育の目的があり、それが本当の

京都市初の女性消防隊員

幼い日の憧れを現実に
させて過酷な現場に
立ち続ける

2016年、京都市に初の女性消防隊員が誕生しました。過酷な災害現場で救助活動にあたる仕事を誇りに思いながらも、一人の若者として未熟さに思い悩む日々。そこに見えたのは、誠実で熱い志でした。



佐々木 かなさん
消防士

「スタートは遠い日の「戦隊モノ」への憧れ」
——京都市初の女性消防隊員ですね。
佐々木 はい。他の女性2人と共に配属されました。
——女性でありながら消防士になられたことに、率直な驚きがあります。
佐々木 この仕事に就いた仲間に消防士になった動機を聞くと、男女関係なく同じ答えが返ってきます。「だって消防隊って、カッコいいやん」と。そこは男性も女性も関係ない世界です。
——消防士を志された経緯を教えてください。
佐々木 大学で情報メディア学科を選んだのは、子どもの頃から絵を描くのが好きだったので、何かを創る仕事があったからでした。学生時代は映像に興味を持ち、約3年間、読売テレビで報道カメラのアシスタントもしていました。事件が起きれば機材一式を担いでタクシーで現場に駆けつけ、撮影する。今の仕事と似ていますね。同じ場所に留まって同じ人というより、いろいろな所を飛び回るのが好きなのだと思います。だから就

職活動期には映像の世界へ行こうと考えたのですが、本当にそれでいいのだろうかと思自問自答した時、こう考えたのです。私にとって、世界で最もやり甲斐のある仕事は何だろう。その時思ったのが、自分を犠牲にしてもというくらい気持ちで、他者を助ける仕事でした。消防士になった男性の先輩からも「やり甲斐のある仕事」と聞いていましたから。
——人を救う仕事というと、他の選択肢もあつたと思います。なぜ「消防士」だったのでしょうか。
佐々木 少し恥ずかしいのですが、小学校1年生の頃に大好きだったテレビ番組「救急戦隊ゴーゴーファイブ」も影響したのだと思います。子ども心に、人命を守る仕事、特に「消防隊ってカッコいい」と憧れていました。女の子でも消防隊に入れたらと夢見ていたことを、就職活動の葛藤の中で、久しぶりに思い出したのです。私は小1から高校卒業までレスリングをしていたのですが、体を鍛えて上達することに喜びを感じていたことも、消防士への道に関係したかもしれません。訓練して自分の力を向上させて、人を助ける。やはり魅力的な生き方だと思っています。

意味での高大接続ではないかと私は考えています。高校生でも2年間A型授業で学べば、非常にしつかりした、本質に迫る文章を書けるようになります。生徒たちには今までそういう機会が無く、私たち教員も彼らの可能性に気づかなかつただけなのです。
——未来を担う若い人たちに贈る言葉をお願いします。
美那川 初代ローマ皇帝アウグストゥスの「Festina lente」「ゆつくり、急げ」という言葉です。21世紀以降、世界や社会は急激に動いています。アメリカ合衆国が、自ら構築した戦後の自由貿易体制を放棄し排他的な保護貿易を打ち出す一方で、中国は共産主義国家建設という目的を忘れて、新たな経済圏構想を掲げ世界に進出しています。また、EUは古代ローマ帝国復活の夢に固執して内部崩壊の問題に頭を抱えています。一方のロシアはスターリンとは異なるやり方で、新たな帝国への道を歩み始めました。ICTは、一周4万キロメートルの地球を瞬で結びつけ、ある地域の出来事が、他の地域に瞬時にして影響を及ぼします。急激に変化する時代だからこそ、一度立ち止まり、物事の本質

を見極める必要がある。自分のことだけでなく、世界中のいろんな人たちのことを考えよう、現在だけでなく、五十年後、百年後を考えようと呼びかけたい。これからの学びは、答えや結果だけを見るのではなく、答えを導き出すプロセスの方に価値があると考えています。AIが目指すものは、このような学びの質的転換、学習のパラダイム転換にあります。ですから親御さんには、子どもの学びの過程をしつかり見守っていただきたいと思っています。それには子どもとの対話の時間や場を可能な限り作ってください。ときには子ども意見によって、親が自分の考えを修正していく姿を見せることも、子どもには良い影響を与えることと思います。
——美那川さんの多角的な思考はどこで培われたのでしょうか。
美那川 大学院での時間が私の人生を大きく変えたと思います。多様な専門分野を持つ院生が研究室に集まり、歴史、哲学の話から雑談までを一日中していました。一人で本を読んで身につけた知識よりも、若い専門家たちと話し合う中で学んだことは私に大きな影響を与えた。まさにAIでした。大学のゼミ形式もそう

ですが、人は他者と接することによって賢くなるのではないのでしょうか。同志社大学では先生、先輩、同級生に本当に恵まれました。
——志をお聞かせください。
美那川 私が願うのは「寛容な社会」です。例えば江戸から明治へと時代が変わる日本において、国家がうまく機能するには市民一人ひとりに教養が必要であると、新島襄や山本覚馬は考えました。何のためか、あらゆる市民に必要なのか。それは、寛容な心を持ち、熟考した上で互いを認め合うことが、あらゆる市民に求められているからです。歴史を学ぶとき、私たちは史料をもとに想像力を働かせながら、異なる時代を生きることができま。人間同士の相互理解も、いわば想像の世界です。相手の表情や言葉など、多様な情報を見ながら相手の心を推し量る。それが寛容な心につながっていくのではないのでしょうか。寛容な心を持つ人が増えれば、もつと寛容な社会になり、日本だけでなく世界中に見られる多くの歪みも、少しずつ解決できるのではと願っています。(2017年7月24日、静岡県立御殿場高等学校にて)

24時間体制で 京都の安全を守る

――消防局に入られてからは、どのような訓練を受けたのですか。

佐々木 まず4月から9月まで、消防学校で訓練を受けました。分厚い防火衣を着て、約7キロのホースを担いで走る訓練が一番きつかったです。ワニみたいな視線を投げかける教官もおられて、心から怖かったですよ(笑)。普段はとても優しい方なのですが、厳しく接することによって緊張感に慣れさせ、命令に絶対従うことを私たちにたたき込もうとされたのだと思います。そうしないと、災害現場で隊員の命を危険にさらすことになりましたから。辛いと思っただけはもちろんです。辛いやつてみないと分からないという気持ちで、今も挑戦し続けています。

――現在の勤務体制を教えてください。

佐々木 24時間拘束の勤務をして、翌日は非番日、その翌日が公休日というサイクルが基本ですが、一部変則勤務があり3週間で6日の休日という勤務体制です。勤務日は午前8時30分に出勤して勤務交

替や車両点検などを行い、あとは訓練や災害出動、休憩を挟んで事務やお年寄り宅への防火指導などをします。23時から翌朝6時までは仮眠をとりながら出勤に備え、8時30分に退庁します。

――京都市消防局ならではの特徴はありますか。

佐々木 災害現場への出動はもちろん大切な仕事ですが、火災の予防にも力を入れているのが京都市の特徴です。私が最初に配属されたのが予防課でした。国際観光都市である京都は貴重な文化財の宝庫ですし、ホテルも多い。火災を未然に防ぐことが重要なので、市民の方々の中へ入っていく、啓蒙活動を行っています。文化財専門の部署もあります。

過酷な現場に必要なのは 強い精神力と冷静な判断力

――消防隊での、実際のお仕事をお聞かせいただけますか。

佐々木 消火活動はもちろんですが、他にも幅広い事案に携わります。例えば交通事故でも、流出したガソリンに引火する恐れがあるような場合は出動して、バ

ツテリーを外したり、ガソリンの処理をしたりします。山や川での遭難者救助にも消防車で出動し、右京消防署では愛宕山の千日詣に警備の担当をするなどします。室内で倒れている方がいるかもしれないという通報があれば、鍵を開けて助けるために救助隊や消防隊が行きます。私自身、自死の現場に入ったこともあります。

――非常にシビアなお仕事ですね。

佐々木 ある時、高齢女性に心臓マッサージをするよう指示されたことがありました。室内で発見した時には意識が無く、既に亡くなっておられるように見えたのですが、諦めてはいけません。でも胸を強く押し込んだ時、消防学校で習った通りであれば、また胸が返ってくるんですね。それが、バリバリという音とともに戻ってこない。ご高齢なので肋骨が折れてしまったのです。現場では学校で習った通りにできないことが多々ある。それを痛感し、悲しみとどこかしさを抱いて帰ったことがありました。上からは「消防車に乗ったら気持ちを切り替えろ」と言われますが、まだまだ難しいです。

――消防士のお仕事で、最も重要な資質は何ですか。

佐々木 やはり冷静な判断力だと思います。いま所属している隊の隊長は実に堂々とした方であると同時に、素晴らしい判断力を持っておられます。火災現場でのホースの入れ方、ロープの張り方、どれも瞬時に的確な指示を出される。私には、あと30年かけてもたどり着けるかどうかというレベルに思えます。

目標は「信頼される隊長」

――現在の、ご自身の課題は何ですか。

佐々木 今お話ししたような、冷静な判断力を養うことです。先輩方から聞くような極端に悲惨な現場にはまだ行ったことがないのですが、そのとき私は本当に冷静に行動できるだろうかという不安があります。私はこの仕事に向いていないのでは、と考えることもあります。体力、筋力における男性との差は仕方ないとしても、その他の資質が大きく足りないのでは。私には既に先輩が2人いるのに、

自信を持って彼らにピシッと指示するのがまだ苦手という、内気な面もある。でも、この仕事では慢心が一番危険だと聞きますので、自分の未熟さは常に認めたくて成長していかなければと思っています。

――激務の中で、心の支えにしておられることはありますか。

佐々木 おこがましいのですが、隊長になりたいという強い思いが支えです。大卒なら最短4年で昇進が可能と聞きますが、私にはまだ、さまざまな経験が必要です。「あの隊長は凄い」と言われるようになるまで、絶対にこの仕事を辞めない覚悟です。

――志望動機には男女関係ないというお話でしたが、実際に消防士として働く上で、女性であることはどう関係しますか。

佐々木 過酷な現場や、女性用の設備が整っていない場所などに私を同行させていいのかと心配してくださいる方が、今でも職場におられます。その度に私は「大丈夫です」と言っただけでいいです。少しでも縮めるために、懸垂やランニングなどの自主トレもしています。た

だ経験も少ないために私の仕事はまだ補助的なものも多く、私が頑張ったからこの人が助かった、元気になったという実体験が、まだ希薄です。そのためにも「女性だから」という理由で特別扱いはされず、一人の人間として信頼してもらえるようになりたいです。一方では女性であることも生かしながら、要救助者に安心感を持っていただけの隊員になりたいですね。ただ、親のしつけが厳しかったので、男性と同じように働く職場にいても、女性としての品は保ちたいと思います(笑)。

――将来は、具体的にどうステップアップしていきたいですか。

佐々木 今の消防隊には女性の先輩がおられないので、具体的な将来像がなかなか描けないのが正直なところですが、結婚、出産という人生のイベントもあるかもしれません。それが仕事にどう関係していくのかを今後考えながら、私の後に続く女性が増えるよう、真摯に職務と向き合っていきたいと思っています。(2017年7月27日、右京消防署にて)